子どもの絵本体験を促進する活動支援に関する実践研究

―大学・美術館・図書館・科学館の相互連携による新たな活動モデルを目指して―

刈谷市美術館　館長代理

松本　育子

〔研究の目的〕

刈谷市美術館では、平成 10 年に開催した絵本作家・瀬川康男の企画展をきっかけに絵本を積極的に取り上げた企画展開催や作品収集等を密接に関連づけた美術館活動を行ってきた。美術館隣の刈谷市中央図書館では、約 70 万冊の絵本を所蔵し、絵本のおはなし会や絵本に関した講演会、市民ボランティアとの協働事業等を行っている。また、刈谷市と同じく愛知県西三河地区に位置する碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館においては、日本沿岸の魚類の保護・展示を行うとともに、自然観察会等の積極的な教育普及活動を行っている。

このように同地域の美術館・図書館・科学館において、閲覧用絵本が用意されているなど、絵本に関する活動が各館単独で行われている一方、科学館においては、科学絵本等を活用した取り組みが十分になされてはいない。なおかつ、各館の機能を生かした絵本に関する活動内容の展開や担当者同士の協働、情報共有、ネットワーク化しての利用者支援体制が未整備な状態といえる。

本研究では、「刈谷市文化振興基本計画」（愛知県刈谷市）において、《「絵本」がいっぱいのまちづくり》として特色作りに位置づけられている「絵本」を核として、美術館・図書館・科学館・大学が連携し、子どもの絵本体験を促進し、利用者支援の体制活性化を図る新たな活動モデルの構築を目的とした。

〔実践内容〕

１．絵本関連の活動状況および利用者調査

実践研究に着手するため、研究対象となる刈谷市美術館、刈谷市中央図書館、めばえ図書室、夢と学びの科学体験館、碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館における絵本の蔵書状況、絵本関連の活動実績を調査した。その後、各館において、絵本関連の活動に参加した利用者（子ども、保護者）に対するアンケート調査を行った。結果、被疑者の 9 割が女性で、刈谷市在住の子育て世代（31 歳～40 歳）が半数を占めており、その 7 割の子どもが未就学児の女児で、ほぼ全員が絵本を好きであり、週に 3 回程度絵本を読んでいる。被疑者の 8 割が絵本の催し物への参加経験があり、場所としては刈谷市中央図書館が最も多く、参加を希望する曜日は土曜日の午前中が最も多いなど、利用者の現状を把握できた。

２．他地域の相互連携に関する活動の調査

論文「科学館における地域連携活動の展開―科学絵本の読み聞かせと体験活動を結ぶ新しいスタイルのワークショップの実践」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』(vol.3　2013 年)の実践の場となった愛知県蒲郡市「蒲郡市生命の海科学館」と、「みたか・子どもと絵本プロジェクト」の拠点である「三鷹市星と森と絵本の家」での活動状況を調査した。

３．相互連携によるプログラムの構築・実践

⑴協働による相互連携プログラムを構築

１と２の調査結果から、すべての館で村上康成氏の絵本が蔵書されている現状を把握できた。村上氏は、日本のみならず海外においても自作と自然と組み合わせたワークショップを展開しており、本研究としては、碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館を場所として、絵本と作家、子どもを組み合わせたプログラムを考案し、村上氏のワークショップを実践することにした。各館の役割分担としては、刈谷市美術館は村上氏との連絡調整およびワークショップのコーディネート役。碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館は展示資料に関する専門的知見および研修室等の提供、並びにプログラム作成における現場からの指摘を担い、協力者の岡崎女子短期大学の鈴木穂波氏は幼児に対する絵本の活用方法およびプログラム作成における専門的知見の提供を担うことになった。

⑵碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館での実践、ワークショップの開催

学芸員からの展示生物の情報提供を受け、三河湾に生息するタコを描くことになり、《「碧南に大ダコあらわる！」水族館で絵を描こう》と題することに決定した。ワークショップにあたり、村上氏からの「子どもたちに絵を描く楽しさ、面白さに出会って欲しい。絵を生み出すことの歓びを実感して欲しい」との希望を受け、子どもたちが生き生きと創作の世界を楽しめるように配慮することを確認した。

①実施日時：平成 29 年 9 月 10 日　②実施場所：碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館　研修室

③参加者：20 名（小学 1 年生から 4 年生まで）

写真１　制作の様子

写真２　大ダコの完成

〔研究成果〕

美術館、図書館、科学館という社会教育施設にとっては、二つの成果が考えられる。一つ目は、本研究が未就学児を含めた小学生低学年も含めた世代対象とした展示活用プログラムの一つとなることである。二つ目は、美術館、図書館、科学館、大学が協働したことで、関係者それぞれの専門性が明らかになる一方、異なる分野との連携による利用者支援体制の有意義な効果が実感できたことである。こうした協力体制の構築は、今後の各館の事業の際にも積極的に活用していきたい。

利用者、特に就学児を含めた小学生低学年も含めた世代を持つ保護者にとっては、科学館等の展示を今までと異なる視点で子どもと一緒に楽しむことにつながったと考えている。

最後に大学にとっては、教官の実践研究の場となるとともに、学生が自ら調査や見学に行く、アクティブラーニングの絶好の場となったと考えられ、社会教育施設としての役割を今後も継続していきたい。